

CORRENTE

Centro Culturale Italo-Giapponese

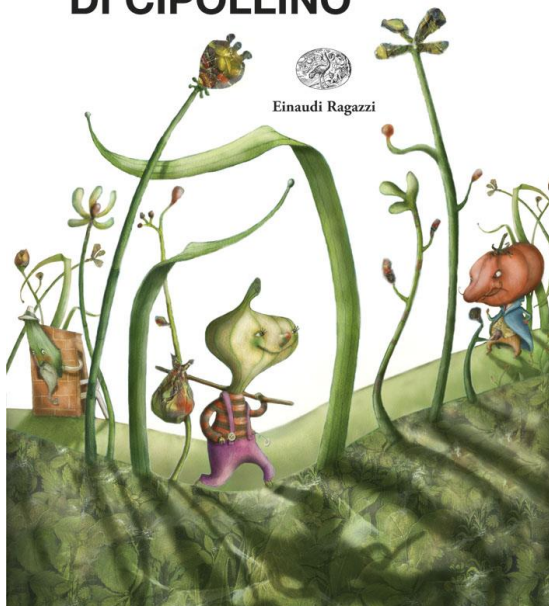
わたしとロダーリ②

リエート・フィーネは学校に

竹田 理乃

子どもの頃に好きだったものと言えば、草食の恐竜と6月末に食べる京菓子の水無月。反対に、好きでなかったものは、ひとつは野菜、それから学校でした。幼い頃に「チポリーノの冒険」と出会っていたら、私はもっと早く苦手を克服できていたかも知れません。

Gianni Rodari

LE AVVENTURE
DI CIPOLLINO

【チポリーノの冒険 表紙】

出典元: <https://www.edizioniel.com/prodotto/le-avventure-di>

-cipollino-9788879268028/

ジャンニ・ロダーリにとって最初の小説作品で、また代表作でもある「チポリーノの冒険」の主人公は、題名にもあるとおり《チポリーノ》くん。Cipolla(チポツラ)に縮小の接尾辞《-ino》をつけて Cipollino(チポリーノ)。語感がかわいいので、なんだか味気ないですけど、あえて和訳すれば《小さなタマネギくん》になります。この野菜、包丁を入れた途端に目にしみてしまって、涙がぼろぼろ落ちるなんてよくあることですよね。そんなタマネギらしく、チポリーノも一筋縄ではいかないキャラクターになっています。

冒険の舞台はいわゆる《おとぎの国》です。私たち人間のような社会を形成して暮らす野菜たちや、言葉を話す動物たちが住む国で、レモン大公を頂点とする封建的な政治システム…というより、領主たちの気まぐれによって統治されています。チポリーノはそんな国の貧しい家庭に生まれた、いわゆるピノッキオ式なやんちゃさと気の強さのある、ぴりりと辛い下町っ子です。

お話が始まるのは、お出かけ中のレモン大公の行列が、タマネギ一家の暮らす貧民街にさしかかった時です。沿道にはおおぜいの民衆が並んでいたのですが、一家の暮らしを背負う真面目で心優しいお父さんが、人混みに押されて行列に突っ込み、よりによってレモン大公の足を踏みつけて、逮捕されてしまいます。監獄まで面会に行ったチポリーノは、お父さんに「悪人について学ぶように」と諭され、旅に出かけることになり、行く先々で出会う悪人、たとえば横暴で暴力的なトマ

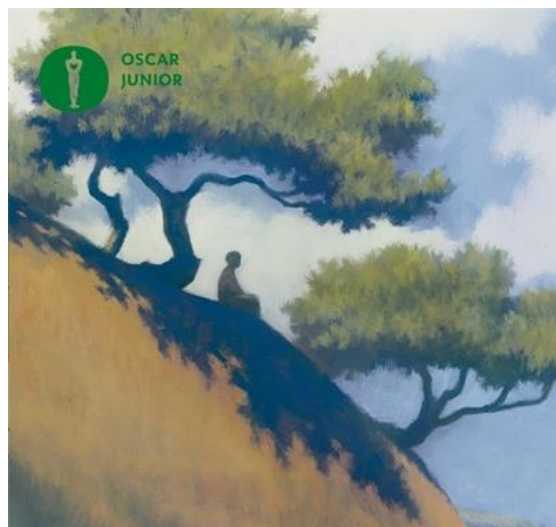
ト騎士や、のちにチポリーノの親友となるチリエジ
ーノ(小さなサクランボ)を虐待するサクランボ公爵
夫人たちなどと対決していきます。いろいろとエピ
ソードが入っている物語なので、それは皆さまに
は各々で楽しんでいただくこととして、ここでは「チ
ポリーノの冒険」が持つ大きな目標、つまり、か弱
い市井の人々がチポリーノの活躍によって結び
つけられ、自らを虐げる压制者レモン大公を打倒
するというストーリーにだけ、着目してみようと思
います。

市井の人々が地下活動を通して団結し、受け
入れることのできない方針を振りかざす压制者を
打倒するという物語は、第二次世界大戦末期に
パルチザン活動へと身を投じ、ファシストとの戦い
の当事者として終戦を迎えたロダーリにとって、
身近な成功体験でもありました。

ロダーリがミラノの北にあるオルタ湖のほとり、
オメーニャという小さな街に生まれたのは1920年。
イタリアを第二次世界大戦に導いた政治家ムツ
リーニが、後にファシスト党という政党にまで発展
した「戦闘ファッシ」を結成したのは、その前年
でした。つまりロダーリは、ファシズムがどんど
ん力をつけていくのを目の当たりにしながら成長
した世代に当たります。そのような世相のなかで
大きくなったロダーリですが、早くに亡くなった
父親が反ファシストであったことや、学生時代
には友人たちとともに共産主義へ接近していた
ことから、ファシズムに傾倒することはありません
でした。ですがロダーリが師範学校を卒業し、
家庭教師や小学校の教師として働いていた頃
は、ファシストであることが公務員や教師など
の採用条件になるなど、非ファシストとして
生きることは困難になっていたもので、
ロダーリも意に染まない活動に参加
せずにはいられなかったようです。

やがてイタリアは第二次世界大戦に突入し、
ロダーリ自身は健康上の理由から兵役を免除
されたのですが、彼の友人たちは戦場に送ら
れることとなりました。そのうちの2人を地中
海とソ連の戦線で失い、また兄弟がナチス
ドイツの影響下にあったムツリーニのサロ
政権への協力を拒み、ドイツの強制収容所
に送られたことを受けて、ロダーリはミラ
ノの病院への動員命令を拒否して、パルチ
ザン活動に身を投じます。

山や森に潜んで、特に北イタリアを中心に展
開していたナチスのドイツ兵や、ファシスト
の兵士と戦ったパルチザンの戦いについて
は、イタリア会館の図書館にもありますし、
大型の書店なら置いていることも多い、
イタロ・カルヴィーノの「くもの巣の小道」
を読んでいただければ、雰囲気を感じ
ていただけたと思います。このお話も下町
の少年が主人公ですが、こちらはおとぎの
国ではなく、私たちの知っている現実の
イタリアが舞台になっています。観光ガイ
ド式の、食べて歌って恋をしてのイタリ
アではない、問題だらけでうら悲しいと
ころもあるけれど、どこか心惹かれる
イタリアのお話です。



ITALO CALVINO

Il sentiero dei nidi di ragno

illustrato da Gianni De Conno

MONDADORI

【くもの巣の小道 表紙】

出典元：<https://www.lafeltrinelli.it/libri/italo-calvino/sentiero-nidi-ragno/9788804637134>

イタリア語では第二次世界大戦の終結を
Liberazione(リベラツィオーネ)、つまり《解放》
と呼ぶのですが、それにはロダーリたちパルチ
ザンが、ファシスト政権とナチスドイツから、
イタリアの《解放》を勝ち取ったのだという
意識があるから

です。今でも、イタリア解放記念日にあたる4月25日は、パレードなどのイベントが企画され、明るい雰囲気漂います。私の住んでいたボローニャも、パルチザン活動が苛烈だった街のひとつでした。街の名物であるネプチューンの噴水に面したサラ・ボールサ図書館の外壁には、パルチザンとして命を落とした人たちの遺影が今も掲げられているのですが、解放記念日にはその前で式典が催され、バラの花輪が掛けられるのを、たくさんの観衆の間から見たことがあります。ロダーリが戦闘に参加していたかは不明なのですが、武器の確保に動いていたという証言がありますし、戦後の経歴を鑑みると、思想や文化の面から組織を支える役割を担っていた可能性が高いので、裏方に回っていたのだと考えられています。

戦時中、パルチザン運動の中核組織の一つだった共産党に入党していたロダーリは、戦後も教職には戻らずに党の出版部で働き始めました。そして編集や記者の仕事を経て、子ども向けのコラムを担当するようになり、やがて彼の最初の小説作品である「チポリーノの冒険」が誕生します。レモン大公を倒して、自分たちの望む形の国を作るチポリーノと仲間達の姿は、まだ戦争の生傷が残るものの、新しいスタートを自分たちで切ることができたイタリア共和国の子ども達に、ロダーリが真っ先に用意したハッピーエンドだったというわけです。

では厳しくも楽しげな戦いを制したチポリーノたちが、そのハッピーエンドを迎えた場所はどこかと言えば、それは学校でした。自分たちを苦しめていたレモン大公を追い出したチポリーノの仲間たちは、最終決戦の舞台にして権力の象徴だったレモン大公のお城を、子どもたちのための場所に転用することに決めたのです。

「お城もう、いわゆる「お城」ではなくなって、遊び場のような場所になっていました。もちろん子どもたちのための遊び場です。ピンポンをして遊べる部屋や、お絵かきの部屋、人形劇の部屋、映画を見ることのできる部屋など、なんでもあります。そして、一番楽しい遊び場……そう、学校もあるのです！」

『チポリーノの冒険』(岩波書店、2010)より

そこでは、かつて学校に行くこともできず働いていたチポリーノも、屋敷に監禁されて友だちを作ることも許されず、孤独な日々の中で自信を喪失していたチリエジノも、お話に登場したほかの子どもたちと机を並べていっしょに勉強しています。そしてチポリーノたちの力で自由の身にとったチポリーノの父親チポローネは、勉強する理由を「いったん追い払った連中も、いつかもどってくるかもしれない」からだと言います。

ロダーリはこの長いお話を「これでチポリーノの物語はほんとうにおしまいです。この広い世界には、レモン大公のほかにも悪い君主がいて、お城をかまえています。ですが、そのうちに一人、また一人とすがたを消していき、君主がふんぞりかえていたお城で子どもたちが楽しそうに遊ぶすがたが見られるようになるでしょう。きっとそうだと信じています」と結ぶのですが、前回ご紹介した「ファンタジーの文法」というロダーリのエッセイに目を戻してみると、そこで紹介している物語創作のためのヒントのなかには、まるでチポリーノたちの《お城》で行われているような、数々のレクリエーションの実践方法とともに、その重要性が説かれています。つまりロダーリは、物語のなかで示したハッピーエンドの結び方を、いつ「いったん追い払った連中」である《君主》がもどってくるか分からない、不安定な現実の世界に持ち込もうとしていたわけです。

イタリア語でハッピーエンドのことは、楽しいとか、陽気なとか、喜ばしいとかいう意味の形容詞である *lieto*(リエート)を使って、*lieto fine*(リエート・フィーネ)といいます。ニュースに目を向けるまでもなく、ちょっと辺りを見渡せば「めでたしめでたし」とはいっていない現実が、身に染みて感じられることも多い世の中です。本屋さんに寄って、ロダーリ先生にリエート・フィーネを結ぶコツを聞いてみたいなあと思っていただければ幸いです。

[参考文献]

『チポリーノの冒険』(ジャンニ・ロダーリ著、関口英子、岩波書店、2010)

(当館語学講師)

私を“Lei” と呼ばないで

二宮 大輔

日本で感じるストレスの九割が、敬語とタメロの問題に起因していると考えている。イタリア留学経験のある人ならだれもが、年上の友人や職場の上司、部屋を借りている大家さんなど、日本ならば、敬語を使っていたら相手にも、タメロで会話をしたという経験があるのではないだろうか。つまり、敬称 Lei ではなく、一般的な二人称 tu で話しかけるということだ。そして相手との上下関係や距離感に神経質にならずにすむイタリアの状況に、居心地よさを感じたのではないだろうか。私がまさしくその最たる例である。すっかり味を占めてしまった私は、帰国後、アルバイト先や、学生時代の先輩後輩との付き合いの中で、異常な違和感を覚えるまでになってしまった。敬語を使ってくる後輩にタメロで話しかけること、タメロを使ってくる相手に敬語で話しかけることが、とても威圧的な上下関係をつくり出していることに気づいたのだ。このような威圧的な関係性の中でも、互いに信頼し合える師弟や先輩後輩もいるだろうし、威圧的ではない関係をつくり出すこともできる。相手のことを敬うために敬語を用いるという理屈もわかる。ただ、この敬語とタメロには、敬いや信頼ではない、行き過ぎた何かが、往々にして含まれている気がする。

こんな風に疑問を抱いたところで、私のような留学帰りは、社会経験のない世間知らずと見なされて相手にされないのだが、それでもなお声を大にして言いたい。最近世間を騒がしている諸問題の数々は、敬語とタメロが織りなす威圧的な上下関係の中だからこそ起こったのではないか。両者が互いにタメロ、もしくは互いに敬語で喋っていたならば、某大学運動部のスキャンダルも、数々のパワハラもアカハラも、起こっていないとは言わないにせよ、きっと少しはましな結果になっていた

はずだ。

三島由紀夫の『不道德教育講座』というエッセイ集の中に「オー・イエス」という話がある。三島がアメリカ人教授の家の晩御飯に招待された際、ある大学の総長を務めているという日本人のご老人と居合わせるようになった。英語が得意でない老人は精一杯アメリカ人に愛嬌を振りまき「オー・イエス、オー・イエス」とニコニコ返事をしている。ところがひとたび三島に日本語で話しかけると、「きみは何を書いているのかね？」と、さも偉そうな口調に変わるのだった。晩御飯中、何度も繰り返される老総長の早変わり劇が、三島の目には実に滑稽に映った。老総長が示すように、「日本人には威張り、外国人にはヘイコラする」精神的態度が、日本人には伝統的にあり、インテリになればなるほどその傾向が強いと三島は指摘する。ただ、そんな古い日本のインテリの中にこそ、実は立派な学者が多いのだから、「オー・イエス」的な態度を取ってもいいじゃないかという皮肉交じりの結論でエッセイは終わっている。

これとまったく同じ体験をしたわけではないが、私には老総長の姿がありありと想像できた。それほど納得の行く話だった。相手が日本人なら厳格な上下関係に則って接し、外国人となると途端にその上下関係を取り払ってしまうあの現象は何なのか。イタリアの事例をいくつか検証しながら、日本と比較して考えてみたい。

日本に帰国して先述の違和感を覚えた私が、「やっぱりそうだったか」と、イタリアのタメロ文化を再認識したのが、映画『ただ彼女と眠りたかっただけなのに』(Volevo solo dormire addosso)だった。2013年当時、イタリアの中堅映画監督エウジェニオ・カプッチョの本邦初の上映会を企画していた中で知った、同監督による2004年の作品だ。イケメン俳優ジョルジョ・パソッティが演じる主人公マルコは、外資系の大企業に勤める会社員。傾いた会社経営の再編成のため、直属の上司エンニオに代わり、二十五人の社員を解雇する使命を、上層部から言い渡される。首になったエンニオと別れの挨拶をする神妙な場面、二人きりのオフィスで、マルコの見事なタメロが炸裂する。



【ただ彼女と眠りたかっただけなのに】

出典元: <https://www.imdb.com/title/tt0430746/>

Marco: Mi dispiace molto, Ennio. Adesso che farai?

Ennio: Qualcosa farò. Che cosa fai ancora lì, Marco. Stai perdendo tempo. E' questo che ti ho insegnato? Muoviti, Marco. Fai il target e non fare cazzate.

Marco: Grazie di tutto, Ennio.

Ennio: Ciao, Marco.

Marco: Ti stimo molto.

以上の会話を日本語にするとこんな感じだ。

マルコ:とても残念だよ、エンニオ。これからどうするの？

エンニオ:何かはするさ。それよりも何しているんだ。時間を無駄にするな。私が君に教えたのはそんなことか？ 動くんだ。目標を達成しろ、バカなこととはするなよ。

マルコ:ありがとう、エンニオ。

エンニオ:じゃあな、マルコ。

マルコ:君を尊敬しているよ。

「これからどうするの？」と、首になった上司をタメロでいたわるマルコ。「私が君に教えたのはそんなことか？」というエンニオのセリフからは、エンニオがマルコを教育する立場にあったことが伺える。それに対してマルコは、「君を尊敬しているよ」という作中で繰り返されるキーワードで、エンニオに別れを告げる。職場で、自分の教育係だった上司に対して、尊敬の念があるにも関わらず、自然なタメロで物語は進行する。日本語に直訳するとなんだか滑稽なシーンに思えてくるため、字幕制作にあたっては、その不自然さを消そうと、マルコは敬語で、エンニオはタメロで話させるという苦渋の決断を取った。それはそれで、マルコとエンニオの関係性が、本来のそれとは微妙にずれる結果となってしまったことは言うまでもない。

次に、日本では明らかに敬語とタメロの状況だが、イタリア語では敬語同士で話しているというケースを見てみたい。学校における生徒と教師の関係である。学校ものの映画は多数あるが、ここで取り上げたいのは大人気ヤングアダルト小説を映画化した『ミルクは白く、血は赤く』(Bianco come il latte, rosso come il sangue)。私がこの作品を鑑賞したのは二、三年前の飛行機の中だったが、現在は動画サイトNetflixで日本語字幕付きで鑑賞できる。上級生に恋心を抱く高校三年生のレオ(※イタリアの高校は五年制)が、臨時でやって来た代行教員の男性とやり合う場面。後に信頼関係を築く二人の出会いの場面では、男性教員が、ふざけてばかりのレオを懲らしめるため教壇に立たせる。

Professore: Venga alla lavagna.

Leo: No, come lavagna, prof. Non mi può interrogare il primo giorno.

Professore: Infatti. Ma visto che è tanto coraggioso, oggi farà lezione Lei.

Leo: Va bene.

Venga alla lavagna と、敬称 Lei の命令法で

始まるこの文章を訳すところなる。

先生: 黒板の前へ来てください。

レオ: 黒板だって? 初日から口頭試問をしてはいけませんよ。

先生: そうですね。でもあなたはとても勇敢なので、今日はあなたが授業をしてください。

レオ: わかりました。

このように、生徒と教師の間で敬語を交わし合うことはよくある。相手のことをあまり知らないとなると特にそうだ。しかしそれも場合によりけりで、映画の中でも、その後、ボクシングのリングで殴り合いながら、先生がレオに本当の気持ちを吐き出させるという場面が出てくる。こうして親交を深めた後、先生がレオにこう申し出る。「君を殴った今は、私に tu を使って話してもいいぞ」(Adesso che ti ho menato, mi puoi anche darmi del tu.) 本音を吐き出して仲良くなったのだから、タメロを使い合おうというわけだ。だが、レオはその後、親しくしつつも、先生には Lei で話し続ける。つまり先生は生徒にタメロで話し、生徒は先生に敬語で話す日本的な関係が姿を現すのだが、先生が生徒に向かってタメロで喋ろうという提案は日本ではありえないし、先生の言動には、威圧的な感じがまったく含まれていない。

Netflixで同作品を見直したところ、日本語字幕は、基本的に全編を通して両者ともにタメロになっており、「私に tu を使っていいぞ」の字幕は「これからは何でも相談を」と訳されている。二人の距離が近づいたことはわかるが、原文の mi puoi darmi del tu のように、タメロで話すことの明確な承認ではない。ボクシングの場面でのポイントは、Lei から tu への移行を促すはっきりとした境界線が、原文には存在していたということで、それをおざなりにしては、レオと先生の関係性の変化がしっかりと捉えられない。

以上の考察から、日本とは大きく異なるイタリアの敬語・タメロ事情が見えてくる。すなわち、社会階級や年齢によるヒエラルキーに関わらず、敬語には敬語、タメロにはタメロという、フラットに話しやすい関係性を好むということ。さらにそこから、『ミルクは白く、血は赤く』の先生のように、能動的

にタメロに移行しようとするケースもあるということ。日本では、社会階級や年齢から、まず相手との上下関係を推し量り、しっかりと自分の立場を固めてから相手と話しはじめることが多いように思われる。言ってしまうえば、イタリアの人付き合いは積極的で、日本の人付き合いは慎重だ。

作家の島田雅彦は、今年四月の日経新聞コラムで、ヨーロッパやアジア諸国における知らない人への話しかけやすさの根拠を、ヒューマニズムに求めていた。「ヒューマニズムは狭義にはルネサンス以降の人文主義のことだが、転じて博愛、人道、教養を謳う態度を指すようになった。その萌芽期には専制君主や教会権力の横暴からの解放、市民意識の覚醒、個人の自由の追求といった社会変革を伴っていた」。思うに、日本はこの種のヒューマニズムを欠いてきたのではないか。ゆえに、外国人と接するとき、彼らが持っているヒューマニズムの強大な吸引力に巻き込まれて、お家芸の慎重な人付き合い取り払わざるをえなくなるのではないか。

もちろんイタリアにも日本的な上下関係がないわけではない。しつこく最近の映画を例にすると、『いつだってやめられる』(Smetto quando voglio)における教授と院生や、『ゴモラーTV シリーズ』(Gomora - La serie)におけるカモッラのボスと部下たちなどの関係がそうだ。これらのケースも検証したいところだが、ともあれ最終的には、上下関係があると言っても相手と喋りやすそうなのに変わりはないという印象に帰結するだろう。

イタリアという国は、他の部分でストレスを感じることもあろうが、こと人間関係においてはストレスフリーな理想郷だと思えてならない。

(翻訳家)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: http://italiakaikan.jp/